ショートレター

日本教育工学会論文誌 41(Suppl.), 153-156, 2017

コースデザインと授業実践を含むプレFDプログラムの開発 –大学コンソーシアム京都における「人文学入門」を対象に–†

田口真奈*1・福田宗太郎*2

京都大学高等教育研究開発推進センター*1・大阪体育大学学習支援室*2

京都大学文学研究科プレ FD プログラムは2009年から実施されてきたが，多様な学生への教育指導やコース全体のデザイン，様々な教授法の習得が課題として挙げられていた．そこで，単位互換科目「人文学入門」を対象として，コースデザインと授業実践を含むプレ FD プログラムを開発した．本プログラムに参加し，授業を担当した講師（以下，担当講師）たちは数回にわたる事前ミーティングを経てシラバスを作成し，単位互換提携校９校からの学生を対象にアクティブラーニング型の授業を行った．事後アンケートから受講生が授業に満足していたことが示された．また担当講師への事後インタビューから，担当講師のアクティブラーニングに対する認識が変化したことが示唆された．

キーワード：プレ FD，コースデザイン，アクティブラーニング，大学教育，大学コンソーシアム

1. 問題と目的

近年，将来の大学教員を輩出するような研究大学において，大学院生やポスドクを対象としたプレ FD と呼ばれるプログラムが企画・実施されている．対象となる受講者の範囲や実施期間，プログラムの内容は様々ではあるが，少なくない大学で正規のカリキュラムとして導入されつつある傾向にある(境ほか 2014)．

京都大学でも2012年度から，全学の大学院生を対象とする研究科横断型教育プログラム「大学で教えるということ」が正規科目として教育学研究科から提供されている．そこでは大学教育の動向についての知識や教授法についての講義や演習に加え，参加者同士によるマイクロティーチングを導入している．教育能力養成のために不可欠な授業実践の機会を確保することの難しさは，現状のプレ FD プログラムにおける共通の課題として指摘されている（栗田 2015）が，「大学で教えるということ」でも，実際に学生に対して授業を実践する機会までは提供できていない．

これに対して京都大学の文学研究科では2009年度から「京都大学文学研究科プレ FD プロジェクト」（以下，文学研究科プレ FD）が実施されてきた（田口ほか 2013)．プログラムの成果としては，「教育技術の向上」，「知識の獲得」，「教育者としての意識の向上」，「研究者としての成長」といった意識変容や能力の獲得が定性的にではあるが，確認されている(田中ほか 2014)．しかし文学研究科プレ FD の課題として，以下の３つの点が挙げられる．

一つ目は，より多様な学生を対象とした授業実践の機会の提供である．プログラム企画当初からその必要性が認識されつつも（田口ほか 2013）これまで十分に支援されてこなかった．二つ目はシラバス作成を含むコース全体をデザインする機会の提供である．2011年度以降，事前研修会においてコーディネーター教員を中心にコースについて検討する時間が設けられるようになったが，すでにコーディネーター教員によって，シラバスが作成・公開された後であり，プレ FD プロ

2017年4月5日受理

† Mana TAGUCHI*1 and Sotaro FUKUDA*2: Development of the PFF Program with Course Design and Practices -A Case Study of the Classes “An Introduction to Humanities” at the Consortium of Universities in Kyoto -

*1 Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University, Yoshida Nihonmatsu-cho, Sakyo-ku, Kyoto-city, Kyoto, 606-8501 Japan

*2 Study Supporting Room, Osaka University of Health and Sport Sciences, 1-1 Asashirodai, Kumatori-cho, Sennan-gun, Osaka, 590-0459 Japan

表１　授業形態中，「説明」の占める割合の分布

説明の占める割合	100%	99～90%	89～80%	79～70%	69%未満
2009年度の人数	3	5	4	3	0
2014年度の人数	2	3	5	1	4

※参加講師一人につき１授業を選び，作成された振り返り用授業デザインワークシートより算出.

グラムに参加し，授業を担当する講師（以下，担当講師）たちがデザインするのは自分の担当回の授業内容のみである．三つ目は，多様な教授法の習得である．「授業デザインワークシート」の開発・提供を通して多様な教授法を提示しているのだが，実際の授業において何を取り入れ実践するかは担当講師に任されている．その結果，2009年度の実施時より，ほぼすべての授業がいわゆる一斉講義形式であり，2014年度時点においても多少の変化が見られるものの，「説明」の割合が90%以上の授業が全体の1/3を占めていた（**表１**）.

2015年の審議まとめで「将来教員となるための意識を涵養し，アクティブラーニングやPBLなど，学生の主体的な学びを促すための指導法，教材の作成・活用方法や評価方法等を修得するための体系的な教育の機会」（中央教育審議会大学分科会 2015）の重要性が指摘されているように，これから大学教員になる者は様々な教授法を身につけることが必要不可欠である.

これらの課題を踏まえて2015年度に文学研究科プレFD の発展的取組みとして公益財団法人大学コンソーシアム京都（以下，コンソーシアム京都）における単位互換科目「人文学入門」を対象としたプレ FD プログラムを開発した．本研究ではプログラムの開発プロセスと実施状況からその特徴を明らかにすることを目的とする.

2.　単位互換科目「人文学入門」を対象にしたプレ FD

図１は開発・実践されたプレ FD プログラムの概要を示したものである．図に示したように担当講師は授業のデザイン（コース全体と90分の授業）と授業実践に携わる.担当講師は2013年までの文学研究科プレ FD 修了生の中から文学研究科，センターの合議で４名が選定された．以下，開発のプロセスを述べる.

2.1.　多様な学生への教育指導

文学研究科プレ FD のプログラムには，リレー形式による公開授業の担当が含まれていたが，受講生は京都大学の学生に限られていた．より多様な学生への教育指導の機会を得る方法として，単位互換制度を利用した授業の提供が考えられる．コンソーシアム京都では約50の加盟校と単位互換制度に関する協定を締結しており，単位互換科目を提供することにより，多様な学生の参加が見込める．そこで，2014年の春に京都大学高等教育研究開発推進センター（以下，センター）教員とコンソーシアム京都の担当者は，文学研究科プレ FD 修了生による単位互換科目の提供を文学研究科に提案し,研究科内での審議を経て開講が決定された．それを担当するコーディネーター教員（文学研究科准教授）も決定された．科目名は，今後の展開を考えて「人文学入門」とされ,毎年副題を付すこととなった．授業はキャンパスプラザ京都にて2015年度の後期に週１コマの日程で開講することが決定された.

2.2.　アクティブラーニングの導入

担当講師は文学研究科プレ FD においては，いわゆる「一斉講義」を行っており，アクティブラーニング型の授業の経験はなかった．アクティブラーニングやPBLなど，学生の主体的な学びを促すための指導法を

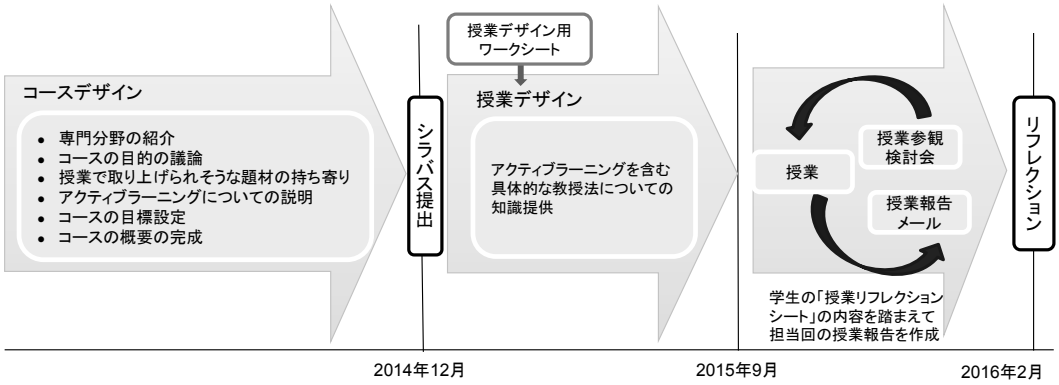

図１　コンソーシアム京都における単位互換科目「人文学入門」を対象としたプレ FD プログラム

修得することの必要性はプレ FD 修了生である担当講師たちも認めるものであったため，「人文学入門」では全員がアクティブラーニング型授業を実施することを決めた．

2.3.　授業報告メールの活用

文学研究科プレ FD では担当授業を含む８回以上の授業参観・検討会への参加が義務づけられていた．これに対して「人文学入門」では，担当授業の直前の回については参観・検討会への参加を義務づけたが，それ以外の回については任意とした．その代わり，授業後に毎回，メールを活用した授業報告を行うことを義務づけた．報告メールには (1) 授業内容の簡単なまとめ，(2) 学生の授業態度や反応について気づいた点を含めることとした．本報告メールにより，担当講師が各回の授業内容や学生の振る舞いを把握できるようにすることで，リレー講義で失われがちなコース全体の一貫性を保つことが期待された．

2.4.　実施体制と役割

文学研究科コーディネーター教員はシラバス決定の最終責任者となるとともに成績入力をはじめとする文学部内での種々の手続きを担当した．また「人文学入門」がプレ FD プログラムの一環であることの説明を含むイントロダクションを初回の授業で行った．センター教員はプログラム内容の提案のほか，さまざまな教授法の知識提供を行うとともに，授業参観を行い，授業後の授業検討会で改善点などを指摘した．また，担当講師の中から講師リーダーを決定し，講師リーダーがシラバスや成績のとりまとめを行った．

3.　実　施　結　果

3.1.　シラバス作成を含むコースデザイン（～12月）

担当講師が選定され，2014年の冬にシラバスを提出するまでの間にセンター教員（第一著者）とコーディネーター教員，担当講師の全員で３回のミーティングを実施した．１回目のミーティングでは，講師リーダーを決定（講師 A が担当）して授業目的について議論を交わした．２回目は授業で使用する実例や問題を持ち寄り，授業を通じて学生に何を身につけさせるのかを議論し，３回目にシラバスを完成させた．この間，講師リーダーを中心にメールでの審議も活発に行われた．センター教員は，「何を教えるか」ではなく，「何を身につけさせるのか」「そのためにどのような具体的な実例や問題を扱うのか」という方向に議論を誘導した．またシラバスの作成段階においてアクティブラーニングについての一般的な説明も行った．

表２　授業形態中，「説明」の占める割合の分布

1	イントロダクション（全員） 哲学とはいかなる営みか（講師 A）	
2	第１部：感性を言語化する（講師 B）	利き酒はいかにして可能か？
3		芸術の価値ってなんだろう？
4		初音ミクに恋することは合理的か？
5	第２部：社会性を理解する（講師 A）	人はなぜ笑うのか？
6		普遍的な価値は存在するのか？
7		嘘は絶対に許されないのか？
8	第３部：他者を視野に入れる（講師 C）	ロボットは思考できるか？
9		他人の気持ちは理解可能か？
10		肉食は悪いことなのか？
11	第４部：人生の意味を考える（講師 D）	運命の人はどう決まるか？
12		仕事とどう向き合うか？
13		幸福は人生の目的か？
14	レポートライティングの基礎（講師 A）	
15	まとめ（全員）	

その結果，到達目標は「実践的な哲学的思考力」の習得に設定され，受講生は「発表や質疑応答，ディスカッションなど」のアクティブラーニングを通じて哲学の思考法を実践的に学ぶものとなった（**表２**）．副題は，「現代社会の諸問題に立ち向かうための哲学」とされた．

評価については，レポート課題を課すこととし，レポートの書き方を担当する講師がルーブリックの素案作成を行い，それを参加講師全員で検討することとした．また，そのルーブリックに基づいて担当講師全員が採点を行い，最終評価はその平均値に基づき行うことも決定された．

3.2.　授業デザイン（～2015年９月）

授業開始までの間，担当講師たちは文学研究科プレ FD と同様に「授業デザインワークシート」を活用して各回の授業内容を準備するようにした．この時，相談があった場合はジグソー法などの具体的な教授方法を適宜紹介するなどの支援をセンター教員が行った．また，すべての授業で，文学研究科プレ FD でも用いてきた「リフレクションシート」を担当講師が準備し，毎回の学生の授業の感想や質問を収集するために利用することも決定された．

3.3.　受講生集めのための広報（～2015年９月）

プレ FD プログラムとして成立するためには，多様な受講生が一定程度集まる必要がある．そのため，受講生への周知のためのポスターをセンターが作成し，広報活動も積極的に行った．その結果，短期大学や京都大学を含む９校から28名の学生が履修登録を行った．

3.4.　授業実施と授業報告メール（～2016年２月）

すべての担当講師により，報告メールが作成・送信された．文字数の規定は設けていなかったため，講師ごとにまた各回の授業ごとにばらつきが見られたが，500～1000字程度で報告がなされた．また，担当講師Ａの発案で，別途，毎回の「ニュースレター」が受講生，担当講師，コーディネーター教員に送付された．これは次回授業のリマインドを兼ねたもので，授業内容の予告ならびに，前回のリフレクションシートへの回答からなるものであった．いずれの回も丁寧に学生からの質問や意見に応えていることがみてとれた．また第一著者が参観した授業（１回，２回，５回，10回，12回，14回，15回）においてはすべてアクティブラーニング型の授業が展開されていることが確認できた．

3.5.　受講生と担当講師の評価

受講生のうち，規定の出席日数を満たさなかった12名を除いた16名全員がレポートを提出し，単位を取得した．そのうち11名から事後アンケートの回答が得られた．５件法で満足度を問うたところ「学生の理解度や反応に配慮して授業が進められましたか」の項目は平均で4.45，「この授業は全体として満足できる内容でしたか」の項目も平均で4.73という高い数値を示していた．また平均値が最も低い項目は「あなたはこの授業に意欲的に参加しましたか」であったが，それでも4.00（未記入２）であり，質問項目の中に平均値が４を下回るものはなく，受講生は授業について満足していることがうかがえた．

また，すべての授業が終了した直後の2016年１月19日，実質的に授業を担った４人全員の担当講師を集めて第一著者によるインタビューを実施したところ「学生が本当にディスカッションをやりたいという熱意がすごく意外だと思った」「今後は自分もこの形式で授業をしたい」というように，アクティブラーニングに対する認識に変化があったことが示唆された．

4.　結論と今後の課題

単位互換科目「人文学入門」を対象として，コースデザインと授業実践を含むプレ FD プログラムを開発し，実践したところ，本プログラムに参加した担当講師たちは数回にわたる事前ミーティングを経てシラバスを作成し，単位互換提携校９校からの学生を対象にアクティブラーニング型の授業を行った．受講生への事後アンケートからは学生たちが授業に対して満足していたことが，また担当講師へのインタビューからはアクティブラーニングに対する認識が変化したことが示唆された．今後は本プログラムに参加した担当講師の授業分析やインタビューを通じて，本プログラムの効果検証を行うとともに，どのような支援のあり方が有効であるかを明らかにしていきたい．

謝　　辞

本研究は科研費・基盤研究（C）（研究代表者：田口真奈）「16K01064人文系科目におけるアクティブラーニング推進のための大学初任教員支援に関する研究」の助成を受けたものである．受講生の皆様，担当講師の皆様，京都大学文学研究科児玉聡准教授，本プロジェクト開始のきっかけをくださった東北大学川面きよ先生にお礼申し上げます．

付　　記

本論文は福田・田口（2016）で発表した研究を発展させて，その結果をまとめたものである．

参　考　文　献

中央教育審議会大学分科会（2015）未来を牽引する大学院教育改革～社会と協働した「知のプロフェッショナル」の育成～（審議まとめ）．http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/09/1366899_01.pdf　（参照日 2017.07.19）

福田宗太郎，田口真奈（2016）アクティブ・ラーニング型授業の実践を取り入れたプレ FD プログラムの実施と評価－京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトを対象に－．日本教育工学会第32回全国大会講演論文集:169-170

栗田佳代子（2015）〈第37回大会　ラウンドテーブル12〉プレ FD の現状からみえる課題と目指すべき方向性．大学教育学会誌 **37** (2): 75-78

境愛一郎，山口裕毅，張磊，久恒拓也（2014）教職課程担当教員養成プログラムのめざすもの－プレ FD プログラムとしての独自性と課題－．第20回大学教育研究フォーラム発表論文集:186-187

田口真奈，出口康夫，京都大学高等教育研究開発推進センター（2013）未来の大学教員を育てる－京大文学部・プレ FD の挑戦．勁草書房，東京

田中一孝，畑野快，田口真奈（2014）プレ FD を通じた大学教員になるための意識の変化と能力の獲得－京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトを対象に－．京都大学高等教育研究 **20**: 81-88

(Received April 5, 2017)